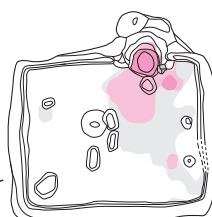
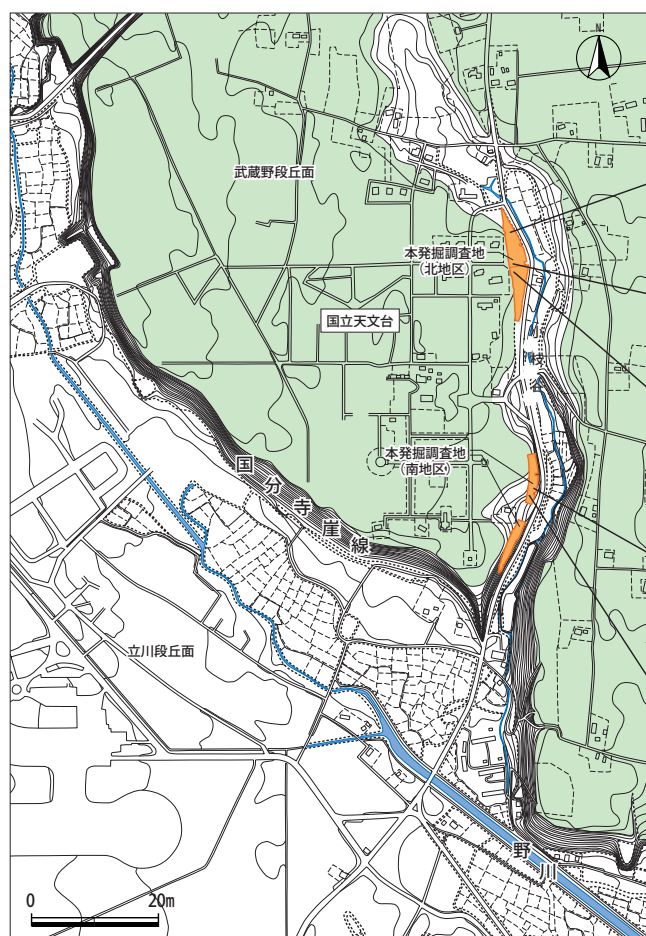


東京都三鷹市大沢

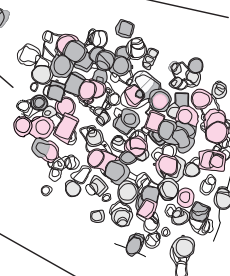
天文台構内遺跡Ⅲ



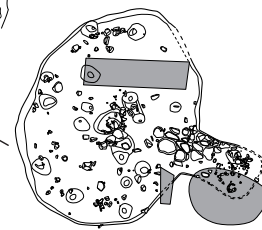
平安時代住居跡 (SI-4)



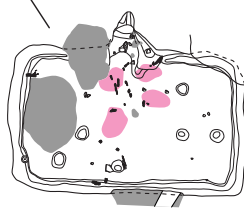
旧石器時代礫群 (SR-12)



近世土葬墓群



縄文時代住居跡 (SI-6)



平安時代住居跡 (SI-5)

はじめに

天文台構内遺跡は、三鷹市大沢に位置する旧石器時代からの複合遺跡で、範囲は274,800㎡に及びます。今回、東京都建設局による道路整備工事に伴い、平成9年度の試掘調査開始から7年間に及ぶ発掘・整理調査が6,600㎡を対象地として実施されました。調査地は南北に細長く、北地区、南地区と呼んでいます。ここでは調査成果の概略を、遺跡の時代毎に紹介します。

旧石器時代の調査

旧石器時代の調査では、立川ローム層（関東ローム層の最上部に堆積するローム層）第Ⅲ～Ⅵ層中に5層の文化層が確認され、各々の文化層には石器集中部や礫群が含まれています。これら遺構はほとんどが北地区で検出されていて、南地区は遺物が散発的に出土している状況です。

第1文化層（Ⅲ層上部）には4基の石器集中部が含まれます。以下の文化層に比べて、定形石器の出土数は少ない状況ですが、尖頭器や細石核など特徴的な石器が出土しています。

第2文化層（Ⅲ層下部～Ⅳ層上部）には4基の石器集中部と3基の礫群が含まれます。石器集中部2aでは箱根産黒曜石製の幅広のナイフ形石器がまとまって出土しました。また、黒曜石製の石器について産地を分析した結果、信州地方のものと箱根地方のものが混在することが分かりました。



第1文化層（石器集中部1d）



第2文化層（石器集中部2a～2c）



第3文化層（礫群SR-12）

第3文化層（IV層中部）は5層の中で最も出土遺物が多く、石器の接合率が一番高い文化層です。本文化層には5基の石器集中部と8基の礫群が含まれます。石器集中部3eは黒曜石が主体石材となっていますが、ほとんどが信州地方の麦草峠（八ヶ岳）産のものでした。他の石器集中部では、珪質頁岩、ホルンフェルス等が主体石材となっています。

本文化層では、大規模な礫群が検出されました。礫群SR-12は構成礫約1,500を数え、いくつかのまとまりが集まったものとも捉えられます。

第4文化層（IV層下部～V層上部）には8基の石器集中部と15基の礫群が含まれます。黒曜石の産地は伊豆・箱根地方が主体となり、信州地方はわずかになります。また、黒曜石と並んでチャートも主体石材となっています。石器の器種は、これまで多かったナイフ形石器が減少し、搔器がやや多く出土しています。

礫群は第3文化層に比べ小規模で、破碎の進んだ細かい礫が目立ちます。

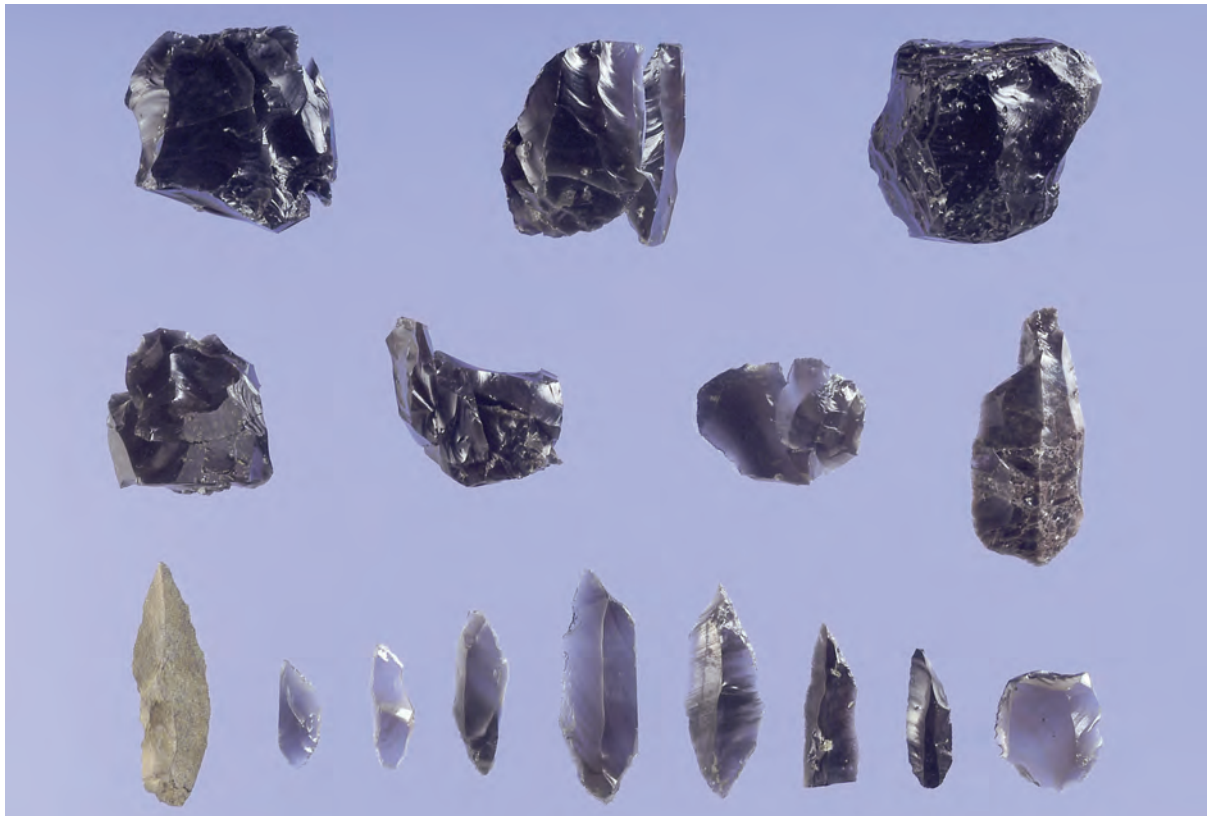
第5文化層（V層下部～VI層上部）では、信州産黒曜石の石器が濃密に分布する、規模の大きな石器集中部が検出されました。上位の第4文化層で主体を占めた伊豆・箱根産の黒曜石は1点も含まれていません。また、小深沢（和田峠）産の黒曜石で作られた大形のナイフ形石器がまとまって出土したことは特徴といえます。



第3文化層（礫群 SR-20）



第4・5文化層（石器集中部4a・4b・5a）



第5文化層 遺物（ナイフ形石器，尖頭器，搔器など）

縄文時代の調査

南地区では柄鏡形敷石住居跡 1 軒 (SI-6) が検出されました。この住居跡は平面形が柄鏡形をしていて、一部を攪乱によって損失していますが、柄にあたる部分 (張出部) には敷石が確認されました。敷石には大小様々な川原石が使われていて、どの石も上面が平坦になるように設置されています。石皿の転用品も 2 点含まれていました。張出部は一般的には出入口施設と考えられているので、出入口から内部への導入通路に敷石が施されていたものと思われます。内部の中央には炉が確認され、周囲で川原石が出土していることから、石囲い炉であったと思われます。

出土土器は縄文時代中期末 (加曽利 E IV 期) ~ 後期初頭 (称名寺期) が主体で、住居跡の時期も当該期と捉えています。このほかに磨石、礫器も出土しています。

北地区の一部の緩斜面では縄文時代草創期の土器が出土しました。当該期の遺構の検出には至りませんでしたが、尖頭器、石鏃、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、磨石、石皿等の石器が伴出しています。石器は狩猟具に比べ食品加工具の量が多いことが特徴といえます。

このほかに、北地区、南地区にわたり集石及び集石土坑が合計 12 基検出されたほか、南地区では炉穴 1 群も検出されました。



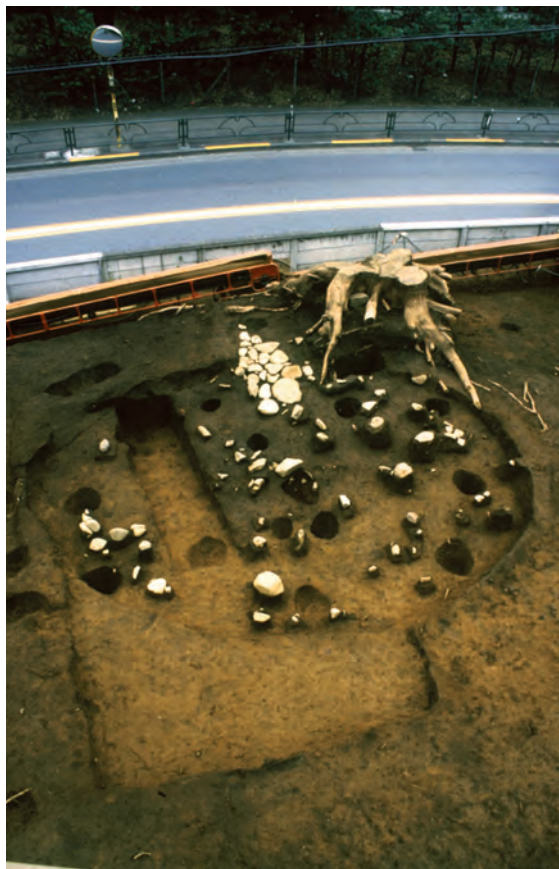
炉穴 (SF-3a・b) 南北区



集石土坑 (SS-24) 南北区



縄文時代出土遺物



縄文時代住居跡 (SI-6) 南北区

古代（平安時代）の調査

平安時代の竪穴住居跡が北地区で1軒（SI-4）、南地区で1軒（SI-5）各々検出されました。

SI-4は北東向きの緩斜面に位置し、北東側にカマドがあります。カマドは崩落していて、粘土や焼土を含むカマド構築土が一带に堆積していました。この土の中からは8世紀後半頃の土師器（甕）が出土したほか、この土以外の充填土からは10世紀中頃の土師器・須恵器（坏・甕）が、床面上などの位置で出土しました。住居跡の時期については、カマド構築土には芯材であった土器片が混入している可能性があるため、床面上で出土した土器により10世紀中頃とするのが妥当でしょう。

SI-5は南東向きの緩斜面に位置し、北側の壁面にカマドがあります。先のSI-4と同様、崩落したカマド付近にカマド構築土が燃料材と思われる炭化材を含んで堆積していました。

炭化材は分析の結果、クヌギと推定されました。出土遺物は9世紀の土師器・須恵器（甕・蓋・坏）などが中心で、これが住居跡の時期と考えられます。このうち須恵器の蓋は内外面に墨が付着していて、硯に転用されたと思われ、表面には「方・富」と思われる墨書が見えます。

このほかに円形土坑が12基検出されていて、うち6基から土師器・須恵器（甕・坏）が出土しています。



平安時代住居跡（SI-4） 北北区



カマド付近遺物出土状況（SI-4）



平安時代住居跡（SI-5） 南北区



SI-5出土須恵器



カマド付近遺物出土状況（SI-5）



SI-5出土須恵器（墨書）

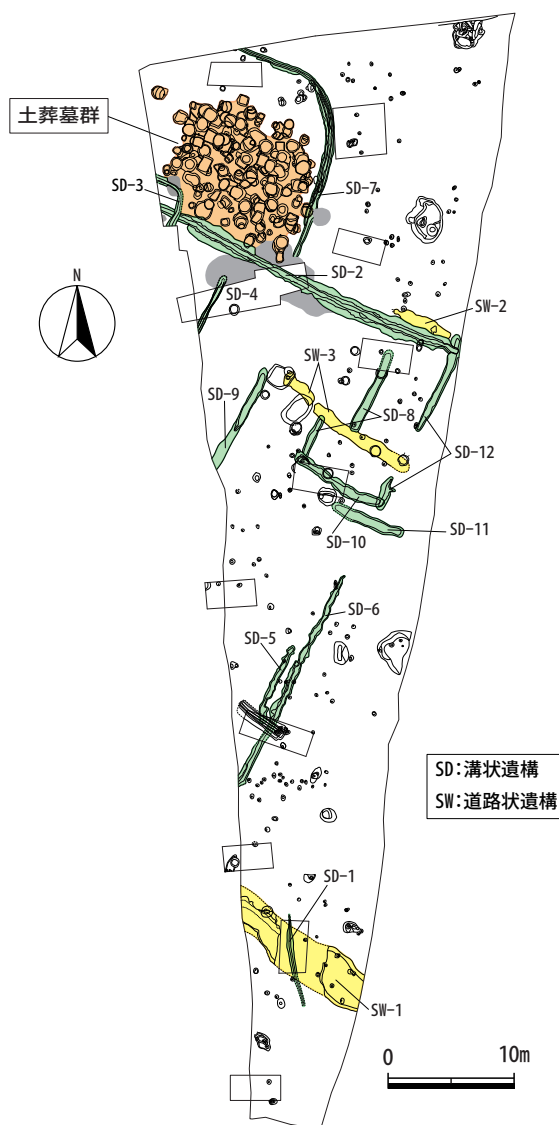
近世の調査

北地区の北端部で土葬墓群 1 群が検出されました。墓坑総数は149基で、平面形は円形、方形及び不整形などが混在しています。地下式坑に類似する形態のもの 1 基や、オーバーハングして掘られた小規模な墓坑17基などが含まれています。墓坑の配置には規則性がなく、複雑に重複し、高密度な配置状況が確認されています。

89基の墓坑で埋葬人骨が確認され、うち55体については性別、年齢などが鑑定されました。年齢は若年（25歳以下）から老年（61歳以上）に及んでいますが、死亡年齢のピークは壮年（26～40歳）です。主な副葬品は六道銭、陶磁器類、土製人形、煙管、櫛、数珠玉などです。墓標・墓石類は出土していませんが、副葬品の年代から墓群の造営は17世紀後半～18世紀後半と考えられます。

かつて本土葬墓群の隣地には長久寺という真言宗の寺がありました（現在は近接地へ移転）。寺に残る資料によれば、境内には檀家墓地がありますが、本群については記されていません（次頁の図参照）。寺の記録にないことや規則性のない高密度な配置状況などから、本群は檀家墓地とは異なる性格の墓地と考えられます。

このほか土葬墓群周辺を中心に溝状遺構13条と道路状遺構3条が検出され、陶磁器類、銭貨等の遺物が出土しています。また、南地区でも溝状遺構1条が検出されました。



近世の遺構配置図（北南区）



土葬墓群全景 北南区



墓坑（SK-32a）



土葬墓群出土遺物

遺跡の地理的環境

三鷹市は武蔵野台地の中央南端部に位置しています。本遺跡の立地する大沢地区は市内の南西部、野川流域を含む一帯で、遺跡は武蔵野段丘面（中位面）と立川段丘面（下位面）を分かつ国分寺崖線に沿って、武蔵野段丘面に展開しています。東側を野川流域中最大級の浸食谷（小枝谷）によって界され、南側の野川と合わせて2つの河川に挟まれた舌状台地の突端部にある遺跡です。

今回の調査地は、この小枝谷に面した斜面地にあたります。かつて小枝谷にはいくつかの湧水地が存在し、特に天文台正門前の湧水量は豊富で、付近には昭和の中頃まで山葵田や水車の見える風景がありました。小枝谷を流れる豊かな水と背後に広がる武蔵野の樹林地という好環境は、旧石器時代から延々と続いてきたものでしょう。



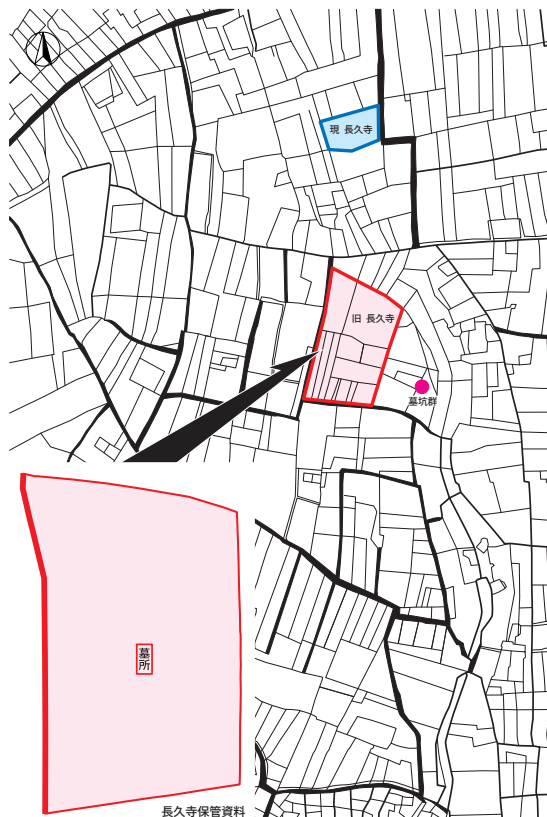
礫層面 南南区

土層堆積状況

今回の調査地は全域が斜面にあたりますが、北地区では表土層～立川ローム第ⅩⅡ層までについて、概ね台地上と同様の安定した堆積状況が確認されました。これを裏付けるように、北地区の立川ローム第Ⅵ層以上では、旧石器時代の遺物が多く発見されました。一方、南地区では立川ローム第Ⅳ層以下に変則的な土層が確認され、下位の武蔵野ローム層では粘土化が進んでいました。これは土層堆積過程で、斜面の崩落など不安定な要素があった結果と思われる、南地区に旧石器時代の遺構・遺物が少ないのもそのためと考えられます。また、南地区では基盤層である礫層が国分寺崖線近くで野川方向に急傾斜する様子が確認できました。この急傾斜付近が武蔵野礫層と立川礫層の境界であると思われます。



礫層の急斜面 南南区



大正年間の地割図及び旧長久寺境内地割

遺跡の歴史的環境

「遺跡銀座」と呼ばれる野川上～中流域にあって、大沢地区には16ヶ所の遺跡と7群の横穴墓群及び1基の古墳が存在します。そのほぼ中心に位置する本遺跡は、旧石器時代から近世に至る幅広い時代の遺跡です。

これまでの調査で旧石器時代の最古資料は立川ローム第Ⅶ・Ⅸ層で出土した剥片石器です。また、第Ⅲ～Ⅳ層を中心にユニット・礫群が多く検出され、ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー等がまとめて出土しました。

縄文時代では早期（撚糸文系）の竪穴住居跡3軒が検出され、当該時期の住居跡としては大形のものとして注目を集めました。ほかに集石（土坑）、炉穴、陥し穴等も検出されています。

古墳時代後期の横穴墓は国分寺崖線の斜面に造営されていますが、天文台構内でも数基の存在が地中レーダー探査によって確認され、天文台構内横穴墓群（仮称）と呼ばれています。

遺跡一帯は天文年間（1532～54）に北条軍と上杉軍が戦った「沢の台古戦場」の伝承地でもあります。今回調査の土葬墓群の西側にあった長久寺は、その戦いで大破したものが慶長3（1598）年に再建されたとされています。長久寺は大正6（1917）年に現在の場所に移設され、その7年後に天文台が港区麻布から移転してきました。このほか、戦時中の防空壕が数多く残っていることなど、本遺跡には歴史的な特徴が数多くあります。

まとめ

旧石器時代の石器が立川ローム第Ⅲ～Ⅵ層で出土し、この間に5層の文化層が確認されました。特に第2～5文化層においては、石器石材である黒曜石の産地が、文化層毎に変化する様子が捉えられました。また、第3文化層では、構成礫約1,500点に及ぶ、礫群が検出されました。

縄文時代草創期の遺物群は野川流域においても希少な発見です。隣接する原遺跡で出土した有舌尖頭器とともに、大沢地区の草創期を検討するための重要な資料です。また柄鏡形敷石住居跡は、武蔵野台地の地域的な特徴とされる部分的な敷石を有するもので、張出部から内部へのスロープ状の設置が確認されました。

平安時代の竪穴住居跡2軒はどちらも小規模で、住居として機能したものか、或いは特殊な機能を持つものかが今後の検討課題となりました。また今回の発見は、特に後背台地上に当該時期の集落の存在を想像させるものです。平安時代の住居跡は市内初の発見であり、三鷹市の「歴史の空白」とも呼ばれる時代の解明が急がれます。

近世土葬墓群の発見は遺跡内で2例目です。先に発見された墓群で見られた墓坑配置の規則性や低密度な状況に比べ、今回の墓群では正反対の状況が見られました。先の墓群が檀家制度における「イエバカ」の一例であることから、今回の墓群についてはそれと異なる非檀家の墓地、村の共同墓地といった性格が考えられます。



調査風景



昭和30年代頃の天文台正門前（南から） 画・穴戸好蔵氏



縄文時代草創期土器